

## 小川正恭先生と民俗調査

Prof. Masayasu Ogawa and Folklore Research

杉井純一\*

Junichi SUGII\*

小川正恭先生は社会人類学者が日本の民俗社会を調査する時に、どのようなスタンスをとるのかということをも身をもって私に教えてくれた方でした。私自身が武蔵大学に在籍していた時の指導教授は渡邊欣雄先生でしたので、当時、小川先生から直接指導を受けるということはありませんでした。ただ、学部1年の時に小川先生の授業を履修し、一番前の方の席に座っていたことは記憶しています。映像を活用された授業で、自分が教員になってから同じように映像を使っているのは小川先生の授業から受けた影響だと思えます。実際に、授業で使う映像については小川先生作成のものをお借りしたこともありましたが（当時は武蔵大学 AV 資料室にたくさんの VHS テープ教材があり、そこには小川先生が録画した映像もかなりありました）。

大学院に進学後は、徐々に小川先生との接点が強くなっていきました。その一つの理由は、当時、小川先生も私も神奈川県茅ヶ崎市の住民で、そのことが縁となり、小川先生が行政の民俗調査に私を誘ってくれたということです。小川先生は以前から『茅ヶ崎市史考古・民俗編』（1980）の執筆委員を担当されており、その後、平塚市、寒川町といった湘南地域近郊の市町村誌の刊行に深く関わっていました。特に、『茅ヶ崎市史考古・民俗編』の調査が行われた堤地区は当時私が子どもの頃から住んでいた場所に近く、またかなり丁寧に調査が行われていたので、その後、私自身が民

---

\*駒澤大学非常勤講師

俗調査に関わる上で大きな指針になるものでした。この堤地区の調査報告の一部は当時、小川先生が指導されていた学生の卒業論文として武蔵大学に提出されています。大学院進学後の私自身の当初の研究関心は日本の新宗教の発生基盤についてでしたので、主にそうした分野に関わる宗教調査を個人的に実施していましたが、市町村誌の行政的な調査については未知の部分が多く、不安な部分もありました。その意味で『茅ヶ崎市史民俗編』の記述はたいへん参考になりました。

その後、小川先生は『平塚市史別編民俗』(1993)の執筆委員を担当されていたのですが、ちょうどその機会を利用して、学生参加の共同調査(調査結果は「平塚市民俗調査報告書4金目・金田」1984に収録)を実施していました。この共同調査に参加していたのは、主に小川先生のゼミや社会人類学研究会に所属していた学生だったと思います。さらに、オブザーバーのような形で、朝倉敏夫先生や堀江俊一先生、そして私も参加していました。平塚市出縄の蓮台寺というお寺の庫裡を借りて、そこに学生たちは寝泊まりし、調査を連日行っていました。それまで、社会学の共同調査は社会調査の実習(埼玉県志木市)で経験済みだったのですが、民俗学の共同調査というものを経験したことがなかったので、これは私にとって、とても貴重な体験でした。このことは共同調査に参加した学生にとっても同様であったと思います。小川先生が労苦を惜みず、現地調査の体験を多くの学生に積み重ねていたことは素晴らしい教育実践であったと思います。ちなみに、この時の調査で聞き書きしたことは今でも授業で使わせてもらっています(湘南平の山中で狐に化かされた話など)。

この時の調査で私が訪れた寺院に「九識靈断師」という看板が掲げられていたのですが、これがその後の私自身の「靈断師」調査のきっかけにもなりました。その意味では、平塚市の共同調査は私自身の大学院での研究活動にも貴重な示唆を与えてくれたものでした。「九識靈断」は日蓮宗の僧侶の一部が行っていた卜占法で、信者の相談を受けて、占いをしたり、護符を渡す儀礼を行っていました。戦時中、皇道仏教に関わってきた人物

が戦後に始めた活動なのですが、その思想の変遷などを当時の駒澤大学大学院紀要『ソキエタス』（「占いをする仏教僧－九識靈断師の思想と行動」1989）にまとめています。この靈断師の調査については宗教学会でも島菌進先生、宮家準先生をはじめ多くの関心を寄せていただいたのですが、その後、オウム真理教の地下鉄サリン事件が起きたこともあり、以後、靈断師の調査を断念しています。「いったい何のために調査するのか」「調査することでどんな社会的影響がでるのか」「内在的理解というアプローチが正しいのか」。そういった根本的な問題を深刻に考えざるをえない、そんな時代状況でした。その意味では、調査をすることの社会性について多くの注意点を与えてくれた経験にもなりました。

その後、小川先生の勧めで『寒川町史別編民俗』の作成にも協力することになり、この時は私も正式に執筆委員として、関わることになりました。『寒川町史別編民俗』（1991）では、日本文化学科の宮本袈裟男先生と小川正恭先生が中心となって、社会学科と日本文化学科の学生が共同で行う調査が行われました。この時は、教職員宿舎の一室を借りて実施していたと思います。調査自体は民俗学の調査法をもとに厳密に行われ、調査項目ごとにまとめられた調査カードが大量に作成されていました。小川先生と私は社会組織の担当でしたので、それぞれ内容を分担して執筆しました。

この調査では寒川町役場の職員の方々が非常に協力的で、かつ予算も十分にあったようで、寒川神社主催の薪能を楽しむような機会も設定していただきました。また、寒川神社の浜降り祭は、近郊でもっとも大きな祭礼でしたので、当時の執筆委員は深夜零時の寒川神社出発から、茅ヶ崎市の海岸まで、神輿の運行に同行するようなこともありました。早朝、寒川町、茅ヶ崎市の主な神社の神輿が浜に集結し、海に入っていく様子は壮観なものでしたが、執筆委員一同、すでに疲労困憊の状態でした。なお、この浜降り祭の象徴論的考察については、『茅ヶ崎市史』の執筆委員であった村武精一先生がまとめられ、村武先生の著書の中に収められています（『祭祀空間の構造－社会人類学ノート』1984、東京大学出版会）。

『平塚市史』『寒川町史』という行政の民俗調査を共にすることで、非常に感銘を受けたのは、調査に臨む上での小川先生の真摯で実直な態度でした。小川先生の専門的なフィールドはオセアニアですので、日本の民俗調査については、ある程度、型にはまった形で調査をされるのではないかと思います。しかし、実際に先生と調査をご一緒してみると、そんなことはまったくなく、熱心に調査に取り組む姿をしばしば眼にしました。先生の専門は親族研究なので、特に「ジエン」「ジミョウ」といった近隣の親族集団の調査についても地道に取り組まれていたと思います。私は異文化、異民族の理解を中心とする人類学者が自文化のフィールドにどのように向き合うのか、当時は気になっていました。吉田禎吾先生や波平恵美子先生の調査などを参照してある程度のイメージはできていたのですが、小川先生は実際の民俗調査を通じて、人類学者はかくあるべきという姿勢を教えてくれたと感じています。

これはあくまでも私の推測なのですが、研究者は専門的な調査研究をするだけでなく、社会的な貢献をすべきであるという考えを小川先生はお持ちだったと思います。自分が住んでいる近郊地域の歴史や文化に関わる調査を行うことで、住民の地域理解を助けるような、そんな知識、情報を残すことがとても大切な事業であると認識されていたと感じます。だからこそ、あれほど真摯に民俗調査に取り組まれていたのでしょう。寒川町は私の母方の親族が住んでいた場所で、当時は私の叔父が町長を勤めていたこともあり、私自身も微弱ながら地域に貢献できたと感じています。

先に述べた寒川町史の編纂作業の途中で、私は個人的な事情から東欧のポーランドに3年ほど滞在することになり(1989~1991)、小川先生にもご迷惑をおかけしてしまいました。日本に帰国してからまもなく、武蔵大学の非常勤講師として、社会学の基礎ゼミなどを担当することになり、その際にも、小川先生からさまざまな形でサポートをいただきました。毎学期の初めには、必ず講師室に来られて「ゼミの様子はどうか?」「今年の学生はどうか?」などとお尋ねになりました。以後、社会学特講、社会学演習、

文献購読、卒業研究演習など、さまざまな科目の担当をさせていただき、そのたびに多くのことを学ばせていただいたと思います。小川先生は私に對しても決して上から目線で注文をつけるようなことはなく、対等な目線で接してくれていました。一度だけ、開発研究をしてみたらどうかと提案されたことがあったのですが、その時は、もっぱらシンガポール華人社会のシャーマニズムやキリスト教聖霊運動の調査に専念していたため、十分にご期待に沿うことはできずじまいでした。

小川先生が退職された後は、年賀状でのご挨拶程度の接点しかなく、晩年の病状の悪化についてのことなどは全く知りませんでした。これまで多大な恩恵をいただいたのに、十分なお礼を申し上げることもできず、お別れの言葉を伝えることができなかつたのは返す返すも残念です。

私にできることは、大学や専門学校の学生に文化人類学という学問の意義を伝えることしかありません。そのことで小川先生の恩にわずかながらも報いて行きたいと思います。いま、思い出すのは、研究会の飲み会の後、東海道線の品川駅で、先生が「特急のお金出すから、湘南ライナーで行こうよ」と言ってくれたことです。こんな小さな一言に小川先生の人柄がにじみ出ていると思わずにはいられません。心より、先生のご冥福をお祈り申し上げます。